

業等が約七割。元明朝の場合、皇太子の元服や瑞雲等の祥瑞によるもので五割を占め、不予・自然災害等不祥の理由によるものが一例もみられない。元正朝は、不予・崩御等で大部分を占め、聖武朝は、不予・災害・疫病等が圧倒的に多く、祥瑞等の理由によるものは、二十八例中四例にすぎない。

以上のように時代を経る程に効果を期待し、その理由も、非常に切実なものへと変化していく。また、ここでは詳しく述べてないが仏教がこの様な流れと並行して、隆盛をもってくる。大赦の後の条に、僧尼を度し、物を賜うという記事も増加し、大赦の例外条項に天平宝字元年閏五月十日の条から「一上略一及毀仏尊像者、不在此例」という条項が、新たに付加されるなど、一つ大赦条項を見ただけでも、仏教の興隆の勢いの程が知れよう。

仏教と大赦に対する朝廷の期待はこの時点でどちらにも、呪術的な性格をもち、天下周く効験を施すものとして、同様に考えられていた様である。

しかし仏教についても、しる事であるが大赦における「徳」を深くとらえないで、すぐに効果あるものと理解するのは、我国には宗教や思想を高めていく土壌の貧弱な由であ

ろう。

しかし年に一度の割で大赦は実施されてきた。そしてそれは、単なる儀式ではなく、非常に実際的であり、反乱や私度僧の動向をみていく上にも、大きな意味をもつのではないかと思う。

『続日本書紀』自力読解の過程で、察し得た「大赦」に関する若干の問題を整理してみた次第である。

小稿ながら、生後始めての公表の私見に対し、先学諸賢の、ご遠慮のないご批判をお願いしたい。

(文学部史学科三年在籍)

芝居興行史料小録

後藤重巳

天保八年七月、宇佐郡岩崎村鎮座の岩崎八幡宮社殿修復費用捻出のため、中津領算所村(北原村)の「三国座」を雇って十日間に亘る芝居狂言を興行した史料がある。

史料によると、「札銭五十文」、「葎銭五十文」であった。

興行日誌

- 七月十六日(晴)「神靈矢口渡」
 - 七月十七日(雨)中止
 - 七月十八日(晴)「仇討」
 - 七月十九日(晴)「近江源氏」
 - 七月廿一日(晴)「恋女房染分手綱」
 - 七月廿二日(雨)中止
 - 七月廿三日(晴)「妹背山」
 - 七月廿四日(晴)「鎌倉山」
 - 七月廿五日(晴)「忠臣蔵」六段迄
 - 七月廿六日(晴)「忠臣蔵」七段迄
 - 七月廿七日(雨)中止
 - 七月廿八日(雨)中止
 - 七月廿九日(晴)中止
 - 八月一日(晴)「絵本大功記」
 - 八月二日(晴)「龜山敵討」
 - 八月二日(興行期間延長願出)
- 七月廿七日夜、雨天で芝居中止の折、「角力取」が酔狂して「遊女を出せ」と言ったことから、喧嘩事件に発展、この不祥事のため、三日間の興行中止令が発せられるハブニクがあった。
- 村側では、右の中止と、雨で、正月十日間の興行不施行を理由に、三日間の期間延長願いを出して、結局二日間だけ延長が認められた。
- 期間中の入場者は、十六日(八五〇)、十八日(一七五)、十九日(二〇二)、廿三日(三五〇)、廿四日(一九五)、廿五日(二四〇)、廿六日(四〇二)、八月二日(四二)、三日(一一〇)、四日(一三四)、千秋楽(一一〇)の計二〇六三人であった。
- 因みに、中津領算所村は、現中津市北原地区であり、当域は、大貞八

幡社の「算所」は「散所」であり、古くから宇佐宮神事たる「放生会」に際し、「クグツ舞」を奉納する村落であり、江戸期には、歌舞伎芝居等を上演するようにもなり、東九州地区各地の神社神事の折や、村落の行事に 上演要請を受けて出演している。

翌天保九年にも、同様興行を申請したが、「時節柄不宜」を理由に、不許可に終わっている。

尚、天保八年の「小見世物興行は社殿修復のため」と言う理由で興行された訳だが、当年中、翌九年にも、社殿の修理されたことを証する史料は、見当たらない。
農民娯楽芝居の方便でもあったのか。
―橋津文書より―

「史学論叢」第七号発行と旧号案内

史学研究会より

―副題省略―

○史学論叢第七号（四九年四月）

右府藤原宗忠の教養とその周辺

河野房男

北京における回民同業の概況

今永清二

飛地領支配をめぐる問題点

後藤重巳

○第一号（四十年一月）（在庫なし）

創刊の辞

賀川光夫

白河院政下の任内蔵頭について

河野房男

中国における回民商業資本に関する研究ノート

今永清二

○第三号（四十二年十二月）（在庫なし）

蒙漢の交易と草地売買

田山 茂

フランス絶対王権と領主の商品流通規制権(一)

志垣嘉夫

北京における駱駝業同業の実態

今永清二

○第四号（四十四年一月）（在庫なし）

ロシア十月革命と中国

横山 英

撰関家と小野宮流(二)

河野房男

高麗李氏朝鮮時代における琉球の対朝鮮貿易に関する一考察

今永清二

地頭とその家臣

後藤重巳

九州の押形文土器について

橘 昌信

史学研究室所蔵文書紹介(一)

後藤重巳

○第五号（四五年十月）

縄文式文化の起源と押捺文土器の発達

賀川光夫

右下臣藤原宗忠と日野法界寺

河野房男

(評) アイユープ・著『バキスタンの再建』

今永清二

史学研究室所蔵文書紹介(二)

今永清二

○第六号（四八年二月）

右府藤原宗忠の仏教信仰

河野房男

咸同年間の雲南回民運動と太平天国の関係

今永清二

近世期における開畑の性格
後藤重巳
対島ガヤキB地点遺物の再発見
小田富士雄

「国史纂集」 第五号

発行者 別府大学文学部史学科

編集代表 日本史研究室 後藤重巳

発行日 昭和四十九年六月廿九日

印刷所 つちや軽印刷 別府市亀川東町4-120